

落語「長屋の花見」の ユーモアとフレーム分析

Patricia Welch, 野村雅昭

キーワード

落語, 談話分析, フレーム, ユーモア, ストラテジー

1. はじめに

本研究では、フレーム理論(frame theory)という概念を扱った先行研究の要点を述べるとともに、その概念を用いて「長屋の花見」というよく知られた落語を談話分析の観点から検討し、ユーモアの生じる言語的過程を考察する。他のあらゆる「語り芸」と同様、談話にも、複数のフレームが存在する。以下では、「長屋の花見」に見られるフレームに焦点を当て、フレーム間のズレや摩擦からユーモアが発生する仕組みを解明する。

2. フレーム理論

最近さまざまな分野でフレーム理論の研究が行われている。人工知能(Artificial Intelligence)の研究では、Minsky(1975)がもっとも有名である。心理学の分野では、Rumelhart(1975)の研究がよく知られている。言語学者では、Chafe(1994)、Fillmore(1976)、Lakoff(1987)がこの概念による研究で著名である。フレーム理論の一般的な定義としてはDeborah Tannenのものが最も明解である。簡単に言えば、Tannenは、フレームをpower of expectationであると説明している。

In order to function in the world, people cannot treat each new person,

object, or event as unique and separate. The only way we can make sense of the world is to see the connections between things, and between present things and things we have experienced before or heard about. These vital connections are learned as we grow up and live in a given culture. As soon as we measure a new perception against what we know of the world from prior experience, we are dealing with expectations. (Tannen 1993:14)

我々は、子供の時から社会の中で生活しているうちに、社会にあるさまざまな枠組みを習得する。人間は、ある出来事を見たり聞いたりした時、それを自分の育った社会と今まで経験した出来事と比べ、関連をつけ、理解する。つまり、これまでに身につけたさまざまなフレームを通して物事を認識している。それができない人間は社会で一人前にならない。フレーム研究は色々な分野で行われており、目的はそれぞれ違うが、どの分野でも「予想の力」を意味する点で共通している。

2.1 フレーム理論とユーモア研究

我々が物事を知覚する際にフレームの果たす役割は重要である。たとえば、よく引用される Schank & Abelson (1977) の誕生パーティーの例では、誕生パーティーという一つのイベントに対して、ある程度社会的に決まっている共通の枠組みがある。客をよび、ケーキを出し、プレゼントをもらうといった、いわば誕生パーティーに付き物の要素がすぐに頭に浮かぶ。つまり誕生パーティーというフレームが存在するのである。さらに、このフレームの中には「ケーキを出す」イベントという、より小さなフレームがある (component frames)。また、「ケーキ」という単語のレベルにもフレームは存在している。また、談話のレベルにも、フレームがある。

以上のように、ある社会の中で、人々がかなりの程度共有しているフレームもあれば、一方にはもっと個人的なフレームもある。たとえば、A という人物は誕生パーティーから「客を招き、ケーキを食べ、楽しい時を

過ごす」ことを思い浮かべるのに対して、B は過去の体験から、「客を招き、ケーキを食べ、悲しい時を過ごす」ことを思い浮かべるかもしれない。このように、同じ出来事や言葉に対して持つフレームは人によって少しずつ違っている。対話の参加者は自分の持っているフレームを相手にわからせようとするのである (discourse frame)。

落語などフィクションに属する談話では、フレームの機構は日常生活よりも複雑になる。作者 (語り手)、読者 (聞き手)、登場人物など異なった立場の人間が、それぞれのフレームを持っていて、それらが複雑にからみ合っているからである。

以下に挙げる言語上のストラテジー (strategy) は、対話の参加者たちがあるフレームを認めているかどうか、それぞれのフレームに対してどのような立場を持っているかを知る指標になる。

- 1) 脱落
- 2) 繰り返し
- 3) うっかりと心の中を暴露してしまうような誤った言い出し
- 4) 因果関係や時間的な問題からくる言い直し
- 5) ためらい
- 6) 否定
- 7) 逆接
- 8) モダリティー
- 9) あいまいさ
- 10) 一般化
- 11) 推定
- 12) 評価
- 13) 道徳的な判断
- 14) 言い間違い
- 15) 付加

(Tannen 1994:41-51)

この Tannen の研究では、被実験者に映画を見せ、それをもう一人の被実験者に伝えさせた。上記のストラテジーは、その比較研究から導き出されているので、日本語を分析するのにも応用できると思うが、国ごとに優先的なストラテジーがある点に注意する必要がある。Tannen の研究で、上記のストラテジーの 2～7 は、頻繁に観察された。このような否定的な要素が現れた場合には、物語の内容が話者の期待に反していることを示す。今回分析の対象とした「長屋の花見」にも、このような否定的な例はあるが、肯定的な例が目立つ。もう一つの問題点は、日本語には、Tannen によるこの分類にはあてはまらないストラテジーがあるかもしれないという点である。例えば、日本語の場合は、次のような構造も含めることができるだろう。

16) 論拠 (ラシイ, ソウダ, ハズダなどの文末形式)

17) 発話者の立場・態度 (ネ, ヨ, ゼなどの終助詞)

18) 可能形

以下では、落語の談話のデータにはいかなる構造的なフレームが現われるかを示し、またはこの複数のフレームの存在がユーモアの源になることを考察することが課題となる。

2.2 フレーム理論とユーモア研究

聞き手は認識した情報を処理するのに単語フレーム (lexical script) と知識フレーム (knowledge frame) を呼び出す。次々に呼び出されたフレームは、前に呼び出されたフレームと比較され、場合によっては、そこで一貫性を持つものとして処理される。それができない場合には、そのフレームを保留したまま、新しい情報を待つことになる。うまくいけば、一つの談話は最終的に一つのまとまりのある意味を持つ。しかし、場合によっては、インプットされた情報の処理が終わったのに、フレームがまだ完全に一つに重なり合っていないことがある。この場合、その談話は、比喩的な意味を持つか、意味を持たないか、もしくは、ユーモアを生じる。したがって、

重なっている複数のフレームがあっても、それが必ずユーモアを生み出す原因になるとは言えない。

Raskin(1985)は、フレームという概念を使って、ユーモアに関する理論を述べた。この理論によれば、いくつかのフレームがずれて重なっていて、しかもそこに何らかの対立が見られる時にユーモアが生じる。以下にRaskinによるユーモアの理論の定義を掲げる。

もし、あるテキストが次の二つの条件を持つなら、このテキストは一つの冗談が含まれるテキストである。

1. このテキストは二つの違ったフレームと部分的、又は、全体的に適合している。
2. この二つの適合したフレームは対立している。

(Raskin 1985:99)

Raskinの理論において「対立」という概念は重要である。一般にユーモアの対立性は次の通りである。

冗談で実際に起こる状態／冗談で呼び起こされた状態		
現実／非現実	正常／異常	有り得る／有り得ない
善／悪 生／死 猥褻／猥褻ではない 金持ち／貧乏 身分が高い／身分が低い		

(Raskin 1985:107-114)

通常我々は Grice(1975)が「協調の原理」と呼んだものに従って言語のやりとりを行っている。しかし、冗談を言う時には、協調の原理を守らない。逆から見れば、話者たちは「ユーモアの協調の原理」に従っていると書いてもよい。話し手の協調の原理への違反に聞き手が気付く時、冗談が成立する。

Raskinの理論はもともと冗談についてだけの理論だが、他の種類の

ユーモアにも応用することが可能である。Attardo & Raskin (1991) は次のような概念を含めて、上に述べた理論からもっと一般的なユーモア理論へ発展させた。下記の引用は、Attardo(1994) による。

- ・ LA (Language) : テキストのことはどのように並んでいるか。どのようなパラフレーズができるか。LA は落語のオチやクスグリの性質を説明するのに有効である。
- ・ NS (Narrative Strategy) : 上部構造 (superstructure, genre) の立場から、テキストはどのようなふう構成されたか。
- ・ TA (Target) : だれ／何がこのテキストで笑いの対象となるか。
- ・ SI: (Situation) : テキストの背景は何か。冗談と背景はどのような関係を持つか。
- ・ LM (Logical Mechanism) : 引き金、テキストにある対立フレームは言語の立場から見ると、いかにして結合したか。テクニックには、種々のものがあり、例えば、並列、相似、類似などが含まれる。
- ・ SO (Script Opposition) : 上述の事物を指示する。

(Attardo 1994:224-228)

「長屋の花見」で一番重要なフレーム対立は、〈有り得る／有り得ない〉の対立性である。現実の世界では、このような貧乏長屋は想像できない。長屋はあまりにも老朽化していて、雨の時に連中は「表へ飛び出」す。この長屋の店子は長年平気で家賃を払わない。ある者は、家賃という概念がわからない。ある時、この長屋の大家は世間の悪評を払拭しようとして、花見を計画する。現実の世界からみると、大家の動機は一面で利己的である。花見をするのに本当の支度は全然しない。しかし、この非論理的な行動は「長屋の花見」のユーモアにかかわる。

3. テキストとしての「長屋の花見」

「長屋の花見」はもともと上方の噺（上方の演題は「貧乏花見」）であったが、明治時代に三代目柳家小さんによって移植され、現在は東京落

語のレパートリーの一つになっている。この噺の東京版と上方版は大筋で似かよっているが、大家の役回りなど、重要な相違点もある。現在、東京で「長屋の花見」を演じる噺家の一人に五代目柳家小さんがある。本研究で用いたテキストは、小さんの口演に基づいている。小さんが1991年4月に東京上野鈴本演芸場で演じ、後にNHKテレビで放送されたものを使用した。口演時間は約28分である。

3.1 テキストの対象と文字化の方法

本研究の目的は、構造的なフレームと談話的なフレームとのそれぞれに対する摩擦や抵抗がユーモアの源になることの解明である。フレームを拾い出すために、テキストを文字化した。読みやすいように、適宜漢字表記を交ぜたが、方言、または、標準語形の確定しにくいことばは発音どおりに記述した。表記は、話し手ごとに、できる限り一行、一つの発話として書いた。発話という概念は Chafe (1994) とザトラウスキー (1993) の研究に従い、以下の点を考慮して、行替えを行った。

- ・ポーズが前にも後ろにも起こること。
- ・話のスピードが加速したり、減速したりすること。
- ・最後のピッチが下がること。
- ・シンタックスの徴表に留意すること。つまり、発話はしばしば節や文に相当すること。

文字化に当たっては登場人物を示すために行頭に英字の大文字記号をつけ、左側に筆記した。それから、噺を談話ごとに分けた。談話資料として落語をみると、いくつか興味深い特徴がわかる。たとえば、落語は、一人の噺家が複数の登場人物による「対話」を一人で演じるため、通常対話とは違って複数の人物の発話が同時に起こることは有り得ないなど通常対話とは異なる面がある。

テキストを作成するために、話し手がだれであるかを特定するのは、この噺ではかなり困難な作業であった。落語では、上(かみ一客席から見て

右側)にいる人物と下(しも一左側)にいる人物は顔の「振り」によって演じ分けられるため、大家のセリフと店子のセリフの聞き分けは難しくないが、店子のうちのだれが話しているかを判定するのは容易でなかった。あきらかに月番のセリフと認められるものは T とし、月番以外の店子のセリフと、月番の可能性はあるが、はっきりしないセリフには R をつけた。大家のセリフは O と記した。表記については基本的に米国と日本の談話分析のしきたりに従った。文字化にあたっては以下の記号を用いた。

{P} 沈黙を示す。談話で沈黙は重要な役割を持つので、できる限り表記に加えた。ただし、本研究の表記では、ストップウォッチによる計時は示さなかった。

— 前の音節が長く延ばされていることを示す。

? 上昇のイントネーションを示す。これは時々疑問文の機能と重なるが、必ずしも一致しない。

. 下降のイントネーションのしるしで、発話、文などの終わりを示す。

, 短いポーズや、句の終わりを示す。

! ある発話のストレスを示す。

[] 非言語的な行動や落語家の笑いを示す。

[] 客の非言語的な行動や笑いを示す。

3.2 「長屋の花見」の梗概

「長屋の花見」は、世間でよく知られている落語である。ある貧乏長屋の大家は、周囲の評判を気にして長屋の連中を花見に連れていくことにした。しかし、大家はけちというよりも彼もまた貧乏なので、花見にふさわしい準備をせず、偽物の酒、玉子焼、蒲鉾を用意する。花見の計画を知らせるために、大家は店子と呼ぶ。店子たちは大家の呼び出しと聞き、心配になる。きっと、店賃のことだろうと月番は考える。噺が展開すると、店子は皆店賃を払っていないことが明らかになる。大家は、店子たちが呼び出しを受けて、店賃の心配をしてくれただけでもありがたいと言い、花見

の計画を知らせる。店子は大家に礼をいう。大家は店子の感謝に恥ずかしくなり、花見のタネを明らかにし、店子たちの協力を請う。それで、大家と店子たちは皆上野の山に出かける。

上野へ行く途中、荷物を運ぶ者は羅宇屋の老人の死について話し出す。それを聞くと大家は腹を立てる。大家は、「もっと陽気な話をして歩きなよ」と店子をたしなめる。上野に着いてからも、同じようなやりとりが続く。大家が望むことと店子がやることの間には差があって、だんだんおかしさが高まってくる。例えば、花見にふさわしい御馳走が欲しいので、店子たちはゆで卵が転がってくる可能性があるから、上野の摺鉢山の下に座りたいなどと言う。また、大家の頼みで御馳走に感謝する振りをするべき時、故意の行動かどうか、店子たちにはなかなかそれができない。（「できない」か「しない」かについては、後で問題になる。）噺の終わりの方で、ある店子は酒を飲む振りをし、「茶柱」にひっかけて、「酒柱が立ったから、ちかぢか長屋にいいことがある」と大家をからかう。これがオチになるが、オチとして上質なものではない。ただし、「長屋の花見」はもともとずっと長い噺なので、これは途中で終わるためのやむをえない便宜的な処置とみるべきだろう。

4. 「長屋の花見」の分析

以下では、Raskin の理論を使って、「長屋の花見」のユーモアを検討する。談話レベルのユーモア、すなわち、発話に移り変わる中で、噺家がいかにして、対立するフレームを提供してユーモアの起こる場面を作るかに焦点をあてる。分析に入る前に、三つの構造的なフレームを挙げる。この構造的なフレームは、長屋の生活、花見、および死である。客はこのフレームの文化的構造が分からなければ、「長屋の花見」のユーモアもわからない。というより、「長屋の花見」はユーモアのある噺にならない。なお、以下に述べるフレーム以外にも構造的なフレームはいくつもあるが、今回はこの三つの主なフレームを分析する。それぞれのフレームには、

種々の前提がある。また、そのフレームが現れる場合には、先行する行動のフレームも含意される。

〈長屋の生活のフレーム〉

関係ある人：大家，店子；店子は大家に甘やかされている。

背景：都会の下町，金持ちはほとんどいないところ。近い昔。

〈花見のフレーム〉

参加者：社会的な地位の高い者も低い者も，大勢の人が出掛ける。

背景：春，桜が咲いている所で行われる。

必要なもの：酒，肴，もうせんなど。

〈死のフレーム〉

参加者：死亡者，（死亡者の家族を含めて）哀悼者，僧侶など。

背景：死亡者の家，焼場など。家と焼場の間の道。

以上のほかに、もう一つのフレームについて述べておく必要がある。それは落語自体のフレームである。これは上記のフレームと同様に大切である。落語の観客は漸に登場する世界は自分の属する世界とだいぶ違うことがよくわかっている。落語で、見かけのもっともらしさ—リアリティー—は当てにならない。このフレーム，すなわち，落語ではたいてい非現実的な世界を叙述するということは，ユーモアを理解するために非常に大切なことである。

4.1 〈長屋〉のフレームの分析

以下に、Raskin の理論，認識のストラテジーを含めて，構造的なフレームを使って，「長屋の花見」の中のいくつかの談話におけるユーモアを考察する。テキストの最初の五つの談話で，長屋のフレームの一部が描かれる。ここで，長屋の店子は月々家賃を払わなければならないという当然のことが話題となる。小さんが演じたこの「長屋の花見」のマクラの中では，理想的な長屋の生活が描かれている。マクラで語られた長屋では，大家と店子が家族のように一緒に暮らしている。大家は店子の面倒を見，

店子は大家を頼りにしている。小さんは自分の育った長屋について話しているため、そのような理想的な長屋が現実には有り得る場所として語られる。

「長屋の花見」の長屋が理想的な長屋と必ずしも同じでないことが最初にわかるのは、本題に入ったところである。ここでは、大家が店子呼び出しているというので、月番がほかの連中を呼び集める。大家がいわゆる「賃店（ちんたな）」の催促のため皆を呼んでいるのではないかと月番は考え、心配する。「賃店」は家賃の隠語として使われる。この倒置のストラテジーは落語でよく使われる。この一連の発話により、フレームがこの噺の中で初めて対立するが、対立性は完全なものではない。その結果、この箇所は次の【笑い】が起こる背景となる。

「賃店」と聞いて、一人の店子は「それは何だ」と質問する。月番の答えで、「賃店」、つまり「店賃」は長屋のフレームに含まれる（「よ」はこの徴表になる）。談話はまだ正常な長屋のフレームの中にある。しかし、この先テキストはだんだん正常な話題から離れてくる。

以下では、テキストを引用しながら説明を加えるが、★はフレームの対立を示す発話を、☆はその誘因となる発話を表す。

- (1) R 店賃を、大家はどうしようってんだ。
T どうしようってことはない。
☆店賃の催促だよ。 正常
R 大家が？
★ずうずうしいもんだな。 【笑い】 異常

月番が使う否定形と終助詞「よ」で、正常な長屋のフレームが存在することがわかる。月番はまだ普通の世界にいる。しかし、店子のびっくりしたような声と答えの内容で、この談話では長屋のフレームに対立が生じていることがわかる。一つは、家賃を払うのは当たり前だというフレームで、もう一つは、家賃など払わないのが当然だというフレームである。正常で

あるフレームと有り得ないフレームが並列されるので、【笑い】がわき起こる。この【笑い】の対象(target)は大家、月番、および、正常な通念を持つ者全員である。

同じような並列は次の談話にも見られる。

(2) T あー、それもそうだ。

いや、

おめえのところか。

半年ぐらい前にもっていったなんてところか。

R ☆半年前に持ってったら、 正常／異常

何もここでもって決まりの悪い思いをしなくてもいい。

T 一年前かい？

R ★一年前なら驚かないね。【笑い】 正常／異常

T 二年前か？

R 二年前なら、

おまえ（はは）何をおめえ、

★ここでもって恥ずかしい思いをしねえですむな。【笑い】

正常／異常

T 三年前か？

R 三年前なら、★大家の方から礼にくらあ。【笑い】

正常／異常

T ばかなこというな。

いったい、いつ持っていったんだよ。

R ふふふ、う、

おめえがこの長屋へ引っ越してきた時に一つもってった。

T おめえ、この長屋へ来て、

ずいぶんになるなあ。

R そう。

★今年で十八年目。【笑い】

正常／異常⇒

有り得る／有り得ない

上記の引用のフレームの対立性は〈正常／異常〉である。一方は、家賃を払わなければならないと考える常識のフレームである。一方は店賃を払わなくても当然だとする非常識のフレームである。小さんは、「…（何年）」という句の反復により、うっかり心中を暴露してしまうような誤った言い出しのストラテジーで、テキストの対立されたフレームを一体化する。

月番が最初にする質問、「半年ごろ前に持っていったなんてところか」はちょっと間接的な表現で、聞きたいことは「いつ払ったか」である。この質問の意味は構造フレームに反していない。半年家賃を払わないのは正常ではないが、まだ有り得ない域には入っていない。しかし、店子は背後にある真の質問に対する回答を避け、質問されたことに表面的に答える。その結果、月番は再度質問をし、店子も再び回答をそらす。このようにして【笑い】が起りやすい場面が次第に姿を明らかにする。

次に、★の箇所に対立したフレームに注目する必要がある。初めは〈正常／異常〉であるが、最後の「十八年目」でフレームをもう一度分析しなくてはならない。ここで、この対話またはこの談話全体の対立性は、〈正常／異常〉から〈有り得る／有り得ない〉に移行する。

小さんは次の談話でも、上記の句を使って、クスグリをこしらえる。

(3) T 十八年前じゃねえのか？

R 何？

★おやじの代だ。 【笑い】

有り得る／有り得ない

T おどかしちゃいけないー。

まったく。

ここで対立しているフレームは、〈金持ち／貧乏〉という対立にも関係

がある。ここでは、親子のフレームを部分的に活性化し、同じ〈金持ち／貧乏〉の対立で、〈有り得る／有り得ない〉フレームが活性化し続けている。先の店子は十八年前に一度、家賃を払った。次の店子は一度も払ったことはないが、店子の父親（おやじ）の代に払ったと言う。この発話の控えめな強調で、「ずっと前（十八年前）」は「もっと前（いつかは分からない）」になる。このギャップの抵抗で笑いが生じる。

以下に述べる例にも、普通である長屋のフレームと有り得ない長屋のフレームが対立している。

- (4) T (おまえは) 金銭にはかてえ (堅い) や、なー?
どうだい、店賃は?
- R ☆{P} ええ? 異常
- T 店賃はどうなっているよ。
- R ☆{P} 店賃? {P} 異常
- ★店賃って何だ? 【笑い】 有り得ない
- T {P} おー? 心ほせえな、
店賃知らないやつが出てきたぜ。
大家さんところ月々持ってく金だよ。
- R {P} ええ?
- T 大家さんところのお金。
- R ★{P} まだもらってない。【笑い】 有り得ない

ここには、長屋の住人は大家に家賃を払うという正常なフレームと、払わないのが当然であるという二つの対立するフレームが見られる。登場人物のやりとりには、特別のストラテジーは用いられていないが、質問者であるTの持つフレームと、答えているRのフレームがズレているため、Rの返答は間抜けに聞こえ、笑いを誘うのである。ただし、「ええ?」という聞き返しは、「大家さんところのお金」という、あいまいさを含んだ表

現に替えるためのストラテジーとあってよい。

この例でも〈有り得る／有り得ない〉のフレームが対立しているが、これで、この長屋の世界が実際の世界とだいぶ離れていることがはっきりわかる。店子の連中が普通の世界の人間とかなり異なる常識の持ち主だということも、明らかになってくる。月番と大家は、普通の人間に近いところがまだ残っており、ノーマルに近いフレームを持っている。

4.2 〈死〉のフレームの分析

次に〈死〉のフレームを検討する。〈長屋〉のフレームの場合と違って、〈死〉のフレームは「長屋の花見」のストーリー全体に見られるわけではないが、〈死〉にまつわる談話も、断片的に現れる。〈死〉は一般に我々にとって忌避すべきものであるから、それを紛らわすためもあってか、笑いの対象になることがある。

〈死〉が最初に話題として出てくるのは、店子が花見の道具をかついで上野の山へ出かけるところである。

(5) T2 ☆おれとおめえとどうしてこうかつぐのに縁があるかな？

〈死〉間接的に活性化

T1 う、やっぱり隣り合っているからだ。

T2 ほらおととしだったな？

羅宇屋（＝キセルの修理屋）のじいさんが死んだときも、二人でもって、差し荷いで焼き場へかついでもってってたな。

T1 そうそう。あの時、雨がしょぼしょぼ降って、

えー、いやな感じだった。 {P}

T2 ほら、静岡に甥がいるつつてさ、

☆おめえが電報打ちに行った。 正常

T1 そう。 {P}

T2 だけど、あの甥もそうだ。

いや、来られねえんなら、来られねえでいいから、
うふ、
どうもいろいろお世話になりましたって手紙を
一本ぐらいよこすがいいじゃねえか。
だんまりてえのはひどいな。

T1 あー、あれか？

あれは何も言ってこないよ。

T2 ☆だって、おめえがわざわざ電報まで打ちに行つてよ。

正常

T1 ★それは電報は打ちに行ったよ。 正常

だけど電報を打つ金がねえじゃねえか。【笑い】

しょうがねえから、

★電報用紙を郵便ポストの中放り込んで【笑い】来たわけだ。

有り得ない

T2 これはだめだ。

それで何も言ってこねえや。

うー、そうかい。

T1 だけどあれっきりあのおじいさんの骨上げに行かねえじゃねえか。

T2 {P} そうだ。 {P}

★ああいうお骨はどうなるのかな。

(注：ここでは、T1 は今月の月番で、T2 は来月の月番に当たる。)

〈死〉のセマンティックなフレームは「かつぐ」という語で活性化している。「かつぐ」が葬式の行列を連想させるので、〈死〉というフレームが間接的に活性化している。ここでは、まだ他のフレームとの対立があるわけではない。談話が進むと、参加者は直接〈死〉について話し出す。噺が起こる一年前に近所の羅宇屋が亡くなった。参加者はそのころのことにつ

いて話す。はじめのうちは、この二人の会話はおかしくない。言っていることは普通の社会の〈死〉のフレームとまったく同じである。長屋の店子は甥に知らせの電報をうちに行ったのにその甥は葬式に来ない。これはこの談話の中で第一に異常な点であろう。しかし、この言い方はあいまいで、二つの解釈が有り得る。一つは、電報を打ちに行き、実際に相手のところに送ったという意味である。もう一つは、電報を「打ちに行^{った}」だけで、実際には送らなかったという意味である。ここでは、「電報用紙を郵便ポストの中に放り込^ん」だけなのだから、甥の手元に届くはずがない。

〈死〉のフレームを中心にして、また、有り得る世界と有り得ない世界が対立している。この異常の社会で〈死〉に対する畏怖の念は薄まっている。

例2と同じように、この談話のフレームの対立性は〈正常／異常〉である。一方は、死を畏怖しなければならないとする正常のフレームである。もう一方は、死は畏怖しなくてもいいと考える異常のフレームである。この談話のストラテジーは言い方のあいまい性に当たる。ここでも、小さんはクスグリとなる句を口にするのを出来るだけ延ばしている。

次の談話で、〈死〉のフレームは同音異義語により活性化される。ここで、店子は死にまつわる話題は花見にふさわしくないので「もっと陽気なことを言って歩け^エ」と、大家にしかられる。そこで次の談話が出てくる。

(6) R ☆ええ、大家さん、おばさんのところからイサンをもらいました。

O うん、よかったな。

R ★胃が悪いもんですからねえ。【笑い】

上の「イサン」で、〈死〉の〈生／死〉が活性化する。「イサン」は「遺産」のことで、亡くなった親戚などにもらうものである。その発話に対して、大家は「よかったな」と肯定の意を表明する。ところが、次の店子の発話により、活性化されていた〈死〉のフレームに反して、ナンセンスな

〈生〉のフレームが現れる。

陳述：遺産（＝財産）をもらいました（＝受け取りました）

正常の〈生／死〉のフレームである

拡張：胃が悪いもんですからねえ

1. 胃の病気で死んだ（??）
2. おばさんが胃が悪く、私も胃が悪い。

陳述：胃散（＝胃の薬）をもらいました。

「胃の病気で死んだ」という解釈は可能であるが、冗談にならない。「遺産」と「胃散」とが同音語であるので、対立性と【笑い】が一緒に出現する。〈死〉は何と対立したかといえ、それは〈生〉であるが、このクスグリにはやや無理があり、レベルは高くない。

〈死〉のフレームに関する談話についてもうひとつ考察する。これは「骸骨」に関する談話である。長屋の連中が上野に着くと、店子の一人は自分たちの着ている物のみっともなさを恥じる。それを大家に言うと、大家は店子の自信を高めるために「ひと皮むけばみんな同じ骸骨／何も自分から卑下することはない」となぐさめる。上記の引用と同じように、この言葉で〈死〉のフレームが間接的に活性化としている。しかし、この長屋の世界は有り得ない世界なので、店子はこのことばが気に入って、その後多用する。

(7) R ああそうですか。

★骸骨かな。

★ずいぶん骸骨が出てやがるな。

★大変な骸骨じゃねえかな。

ええ？

T おい、おい、留公、留公、見ろよ。 {P}

★あの向こうから来る、あの年増の骸骨な。 {P}

- O おい、おい、指を差すんじゃない……、
向こうが驚くじゃねえか、ええ？
- T ★いい骸骨っぷりだな。
★乙な骸骨よ。
★★ああ言う骸骨を抱いて見てえ。

最後に骸骨を抱いてみたいとまで言う。この談話も〈有り得る／有り得ない〉の対立の中に入るだろう。この談話で、この長屋はやはり有り得ない世界に入っていることがはっきりする。この談話の言語的なストラテジーと物語としてのストラテジーが重なり合っている。さらに、もっともらしい理屈でフレームの対立が起こる。しかし、この口演では、フレームが対立しているにもかかわらず、この談話では笑いはあまり起こらない。フレームの対立に異常さがあるからかもしれない。

4.3 〈酒〉のフレームの分析

次に分析する談話は、大家が花見の計画を店子に伝えた直後のものである。この談話で大家は、酒と玉子焼と蒲鉾を、すなわち花見のために用意した物を一度に示さずに、順々に提出する。その談話の前に、この大家の長屋は世間で悪い評判が立っているので、「貧乏神を追っ払う」ため店子を花見に連れて行くことにしたことが語られる。以下の談話で、大家はまだ普通の人間として描かれているが、すでに〈有り得ない〉世界に巻き込まれつつある。

- (8) O うーん、ごらん！
ここに、な、一升瓶がこうやって、
三本あるんだよな？
ほら、
ええ？

これレットルが違うんだ、ほら、みんな。
だけど中身が同じだから、
そのつもりでいいな。
うん、そいから、
ここにな、{P}蒲鉾だ。[両手で切溜めを持ち上げる動作]
こんなかが蒲鉾と玉子焼。
そいであたしが心配してるから。

この談話で、大家の言葉とジェスチャーは普通の花見のフレームおよび酒のフレームと全然対立していない。それを聞いて、店子の一人は、「上野の山はおろか、カムチャッカでも何でも行くだらう」と乗り気になる。「酒」はだれもが飲みたいので、これも構造的なフレームから離れていない。しかし、店子の大げさな喜びようで、異常な世界の印象が強まってくる。この談話で、大家は酒について普通に話している。しかし、大家はすぐにエセ花見のことを白状しなければならない。用意したという酒は実は薄めた番茶であり、玉子焼と蒲鉾は沢庵と大根の漬物である。

(9) O いい色してるだらう。

上の(9)で、偽物の酒のフレームが活性化される。「酒」の意味素性には「色」と「瓶の形」があるが、この条件を満たすものがすべて酒ではない。しかし、大家は、「表面だけが本物のように見えるなら、花見の振りをすることができるだらう」と考える。そして、上野に着くと、大家はまず月番に偽の酒を飲ませ、本当の酒を飲んでいるように演技することを要求する。

(10) O たんとついでもらったら喜べ。

T 喜べたって、

そうはいかないよ。

冗談じゃない，本当に。

[酒を飲む動作] んんんん，いくら陽気がいいたって，
☆こんなもん飲めるわけねえだろう。【笑い】 [湯飲みを置く動作]

(11) R ☆色だけは，本物そっくりだよな。

こいで，飲んでみると違う。

いくらなんでも世の中進んだって，

☆お茶からアルコール成分がとれるわけはねえもんな。うん。

【笑い】

んんんん。【笑い】

店子はいくら飲んでも酔わないから，大家の勧めに対する不満が残る。次に大家が酔った振りをすることを要求しても，店子ほうまくそれに応じられない。このようにして，本物の酒のフレームと偽の酒のフレームの対立により，噺の中では〈有り得る／有り得ない〉のフレームが成立する。大家の行為を一方から見れば，独善的であり，非日常的である。ただし，他方から見れば，それは店子に対する好意に発したものとも言えるから，相殺されてはいる。店子が大家の要求にうまくこたえられないのは，意図的にそうしているのか，本当にうまく演じられないのかは，はっきりしない。しかし，この談話における違和感が繰り返されることにより，笑いがさらに強められる。

4.4 〈玉子焼／蒲鉾〉のフレームの分析

すでに述べたように「長屋の花見」においては，〈有り得る／有り得ない〉という対立するフレームが次々に現れる。このフレームとフレームの間の違和感から笑いが生まれる。最後に，玉子焼と蒲鉾の談話のユーモアを説明する。

- (12) R ふ、ふふふ、【笑い】 玉子焼ね、
 このごろ歯がわるくなっちゃったもんだから 【笑い】
 玉子焼よく刻まないと食べられねえ。【笑い】
- O ばかな。
 おまえもやりなさい。
- R すみません、じゃ、
 白い方もらいてえんですけどもね。
- O 色気で言うやつがあるか。
 蒲鉾か？
- R そのほこ。【笑い】
- O そのほこ。
 蒲鉾だそうだ、取ってやんなさい。
- R うふ、ありがと、ありがと。
 大家さんのまえですがねえ、
 あっしゃ、この蒲鉾はでえすきでね。
- O そうかい、う？
- R 毎朝おつけの実に使いますがね。【笑い】
 千六本に刻むんすよ。
 胃の悪い時にまた、蒲鉾の葉っぱが好きでね。【笑い】
 あ、このごろ練馬の方に行きましてね。【笑い】
 この蒲鉾の畑がなくなりまして。

以下、左に発話を一列に並べて書く。右にさまざまな活性化したフレームと、解釈を書く。それから、冗談の引き金となる語句に注釈を加える。「引き金」というのは、隠れていた事実が露呈する発話のことである。対立していないフレームの解釈は省略する。

- (13) R : ふふふ (ためらい。言い出しにくさを示す。)

- 玉子焼 ・卵焼：食べ物，柔らかい．長屋の店子にとって
 やや高級．
- ・沢庵：食べ物，かたい，安い．（このセリフで
 「沢庵」と「玉子焼」はすでに活性化した．）
- ね （一応肯定する感情，態度を表す．）
- このごろ （省略）
- 歯が悪くなっ ・虫歯になった．固い物が食べられないことを暗
 示する知識フレームなので，沢庵のフレームに
 なる．
- ちゃった （発話内容に対する話者の態度を表す．「玉子
 焼」を断らなければならない．）
- 玉子焼 ・卵焼：（前出）
- ・沢庵：（前出）．（しかし，玉子焼のフレームは
 もう不適切になる．）
- よく （省略）
- 刻まねえと ・切って，細かくする．
 （ここで，刻む物のフレーム，すなわち，沢庵の
 フレームと合致する．）
- 食べられねえ（ここも沢庵のフレームしか指さない．）

ここで、「玉子焼」という単語が使われ，玉子焼と沢庵のフレームが活性化する．もし，食べ物が本物なら，歯の状態と全然関係がないだろう．「歯が悪くなっちゃった」は引き金で，この言い方で，対立されたフレームは統一される．玉子焼は「よく刻」むものではない．偽物だから，〈有り得る／有り得ない〉の対立が現れる．連中の言うことは，本物の玉子焼を話題にしているならば一貫性のない発話である．

(14) O ばかな，おまえもやりなさい．

ここでは、一つの意味しか浮かばない。「おまえも文句を言わずに、偽物をとって、本物である振りをしなさい」という意味である。しかも、それを大家は強要している。

- (15) R すみません。 (相手に対する「わび」と「依頼」を表す)
じゃ (省略)
白い方 ・大根 (沢庵と比べて)
・大根を蒲鉾に見なす。
・蒲鉾に見なすつもりの大根を蒲鉾と名付けながら大根として扱う。
もらいたい (省略)
んです
けどもね (省略)

この発話は、一般的な依頼表現と同じである。活性化されたフレームが少なくとも三つある。一つは本物のフレーム、二番目は大根のフレーム、三番目は蒲鉾が大根であることを知っているのに、蒲鉾のように扱うフレームである。実は、もう一つフレームがある。それは店子たちが、大家が偽物を本物のように扱ってほしがっていると知りながらあくまで大根として扱うというフレームである。

- (16) O 色気 ・色の具合。(一般的な意味である「愛欲」に対して、違和感を惹起する.)
で言う (知識フレーム、大家のいらだちを示す.)
やつが (省略)
あるか (省略)
蒲鉾 ・柔らかくて、やや高級、魚でつくる。=蒲鉾のフレーム。
・固くて、安い。=大根のフレーム。(このフ

レームはすでに活性化された.)

か (省略)

大家の発話で、大家が店子の言うことを第三番目のフレームでとらえていることがわかる。したがって、店子たちは違うフレームをもっていて、上手に盛大な酒盛りをする振りをしていないことがだんだん明らかになる。

- (17) R そのほこ ・SO-ダイクシス, 「その」もの。
(異常のダイクシスに対して活性化された.)
・その蒲鉾をさす。(耳なれない省略形である。
しかし、その蒲鉾は本物ではない.)
- O そのほこ (下がるイントネーションで、あきれたような調子で上記のクスグリを強調する.)
- 蒲鉾 ・(前出) 蒲鉾のフレーム。
・(前出) 大根のフレーム。(このフレームはすでに活性化された.)
- だそうだ (省略)
- 取って (省略)
- やんなさい (省略)
-

この発話で、また蒲鉾の三つのフレームが活性化する。その上、「そのほこ」という省略語形で活性化されるフレームである。大家は、そのフレームを認めない。このフレームで、〈有り得る／有り得ない〉の世界のフレームの違和感が強調される。

(18) R : うふうふ, ありがと, ありがとう。大家さんの前ですがねえ。

この発話は、対立したフレームに直接にはほとんどなにも加えないが、言葉の機能からみると、重要な発話である。話者のためらいを示し、関係を作る言い方および先行発話として噺のユーモアのサスペンスを強める。しかも、この発話は、前の発話と言葉が重なるように演じられる。

(19) R：あっしゃ、この蒲鉾はでえすきでね。

(20) O：そうかい、う？

例18-20で、話し手は、最初の発話で消極的な同意を表す。これは、構造的なフレームと合致する。しかし、次の発話で、小さんは店子の言葉によって、この冗談のオチの基盤を設定する。聞き手は最初に蒲鉾のフレームとしてとらえたので、大家の返答である「そうかい」は、ごく適切である。例20までは、蒲鉾の多重のフレームが残っているが、次の発話の「千六本」ということばが、フレームのバランスを覆す引き金となる。

(21) R：毎朝、おつけのみにつかいますがね。

(22) R 千六本に

- ・大根のフレーム（「千六本」はみそ汁の具にするための大根の切り方をさすので、この言葉はこのクスグリの引き金となる。）

刻むんすよ

- ・固いもの＝大根のフレーム。

胃の悪い

- ・大根は胃病に利くという知識フレームを活性化する。

時にまた

(省略)

蒲鉾の

- ・（前出）

葉っぱが

- ・特に葉が胃病に利くという知識フレームを活性化する。

好きでね

(省略)

(23) R あ、このごろ

(省略)

- 練馬のほうへ ・練馬は最近まで大根の産地だったという知識
フレームを活性化する。
- 行きましたね (省略)
- この (省略)
- 蒲鉾の ・(前出)
- 畑が ・大根は畑で植えられるという知識フレームを
活性化する。
- なくなりまして (省略)

「千六本」という語が発せられるまで、大根のフレームと本物の蒲鉾のフレームが対立としている。長屋の連中の言葉から示唆されるのは蒲鉾ではなく、大根を蒲鉾のように扱うフレームでもなく、ただの大根のフレームだけである。これで、また〈有り得る／有り得ない〉の全体としてのフレームが強調され、機能する。〈有り得る〉フレームの代表者が大家であり、〈有り得ない〉フレームの代表者が店子の連中であることは言うまでもない。しかし、噺が展開して行くのに連れて、この関係が逆転するような錯覚を聞き手に与えるところに、この噺のもう一つのおかしみがある。すなわち、複数の店子が次々と〈有り得ない〉フレームのパフォーマンスを演じることにより、〈有り得る〉フレームの代表者であるはずの常識人の大家は、かえってここでは孤立し、その行動がナンセンスであるかのような役割を演じさせられることになるのである。

5. おわりに

本研究は、フレーム理論の考察に基づき、「長屋の花見」のユーモアについて検討した。フレーム理論により、談話を理解するのに、さまざまなフレームが活性化したり非活性化したりすることを観察するのが有効であることが認められた。新しい発話によって情報が与えられると、聞き手はすでに活性化していたフレームを新しく活性化されたフレームと比べ、一

つの一貫した意味を作る。しかし、その処理の過程で、重複しているフレームは必ずしも一つのフレームに統合していない。フレームの重複は色々な種類の修辭的表現の源となる。ユーモアが生じるのは、一つの談話に重複したフレームが対立して存在するためである。本研究は、「長屋の花見」のさまざまな談話フレームと知識フレームをリストアップし、「長屋の花見」の談話のユーモアを分析した。

ここで筆者たちが用いた〈有り得る／有り得ない〉などのフレームおよびその対立の概念は、Raskin (1985) の理論に基づいている。従って、63ページの表からも理解できるように、〈有り得る／有り得ない〉〈正常／異常〉〈現実／非現実〉という対立するフレームは、同次元における連続的な程度の差と考えるとよい。また、落語において、常にこのようなフレームの対立が聴衆にユーモアを感じさせる要因となっているとは限らない。噺によって、この種の分析が有効なものとそうでないものがあることを指摘しておく必要がある。その違いが何であるのかについては、今後の研究で明らかになっていくであろう。

ただし、これまでの我々の研究の経験から付言すれば、ここで試みたフレーム理論による分析は、落語の笑いを解明する上で有効な方法であると考えられる。野村 (1994, 1996_b) の分析では、オチやクスグリの一手法としてのトリチガエは、重要な位置を占めている。トリチガエとは、同音や類音の語句の聞き違いや誤解・曲解などを含み、かなり長い文脈や時には噺の構成そのものに及ぶ誤解の構造を指す。フレームは、そのいずれのレベルにもかかわる重要な概念である。「粗忽長屋」「百川」「付き馬」などの噺のユーモアを抽出する上で、フレーム分析は有力な武器となるにちがいない。

「長屋の花見」では、笑いを誘うクスグリはたくさん見出だされるが、一つのタイプとしてとらえることが可能である。この噺全体を通じて軸となるフレームは〈有り得る／有り得ない〉の対立であると言えよう。客は落語そのものの「演じるもの」であるというフレームをきちんと理解して

いるので、このような有り得ない世界のフレームが納得できる。客が寄席に入ると（あるいは、落語のテープなどを聞くと）、その客は有り得る世界の境を越えて、非現実の世界に入る。噺家と客は協力し合って落語という〈演じるもの〉のフレームの中で、お互いにユーモアが生まれやすい世界を作り上げていくのである。

[文 献]

- 国立国語研究所 1987. 『談話行動の諸相』（報告92, 秀英出版）
- 野村雅昭 1994. 『落語の言語学』（平凡社選書）
- 1996a 「談話資料としての落語—『火焰太鼓』を資料として—」（早稲田大学大学院文学研究科紀要第41輯第3分冊）
- 1996b 『落語のレトリック』（平凡社選書）
- ポリー・ザトラウスキー 1993. 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』くろしお出版
- Attardo, Salvatore. 1994. *Linguistic Theories of Humor*. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Attardo, Salvatore and Victor Raskin. 1991. "Script Theory Revis (it) ed: Joke Similarity and Joke Representation Model." *Humor*. 4:3-4.
- Chafe, Wallace. 1994. *Discourse, Consciousness, and Time: The Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*. Chicago: University of Chicago Press.
- Fillmore, Charles. 1976. "The needs for a frame semantics within linguistics." in *Statistical methods in linguistics*. Stockholm: Skriptor.
- Grice, H. Paul. 1975. "Logic and Conversation." in Peter Cole and Lerry Morgan, eds., *Syntax and Semantics*, vol. 3: *Speech Acts*. New York: Academic Press.
- Lakoff, George. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Minsky, Marvin. 1975. "A framework for representing knowledge." in Patrick H. Winston, ed. *The psychology of computer vision*. New York: McGraw Hill.
- Raskin, Victor. 1985. *Semantic Mechanisms of Humor*. Dordrecht, Boston, Lancaster, Tokyo: D. Reidel Publishing Company.
- Rumelhart, David E. 1975. "Notes on a schema for stories." in Daniel G. Bobrow and Allan M. Collins, ed. *Representation and understanding*. New York: Academic Press.
- Schank, Roger C., and Abelson Robert P. 1977. *Scripts, plans, goals, and understanding: An inquiry into human knowledge structures*. Hillsdale, NJ: Lawrence

Erlbaum Associates.

Tannen, Deborah. 1993 "What's in a Frame." in Deborah Tannen, ed. *Framing in Discourse*. Oxford, New York: Oxford University Press.

[付 記]

本稿の執筆者の一人である Patricia Welch (ミシガン大学大学院文学研究科博士課程在籍) は, 早稲田大学の外国人研究員として, 日本語研究教育センターで落語の談話分析に関する研究を行った (1994.4-1996.3). 本稿は, その研究の一部をなすものである. Welch の口述発表をもとに野村と協議し, Welch が第1次原稿を執筆した. それに基づき更に両者が検討した結果を踏まえ, 野村が筆を加えたものである.

(1995.10)